主を求めよ、そして生きよ

奨励	近藤　十郎〔こんどう・じゅうろう〕
奨励者紹介	日本キリスト教団城陽教会牧師 同志社女子大学名誉教授

まことに、主はイスラエルの家にこう言われる。
わたしを求めよ、そして生きよ。
しかし、ベテルに助けを求めるな
ギルガルに行くな
ベエル・シェバに赴くな。
ギルガルは必ず捕らえ移され
ベテルは無に帰するから。

主を求めよ、そして生きよ。
さもないと主は火のように
ヨセフの家に襲いかかり
火が燃え盛っても
ベテルのためにその火を消す者はない。

裁きを苦よもぎに変え
正しいことを地に投げ捨てる者よ。

すばるとオリオンを造り
闇を朝に変え
昼を暗い夜にし
海の水を呼び集めて地の面に注がれる方。
その御名は主。

（アモス書　五章四―八節）

わが青春の体験

水の「重さ」（「圧力」というべきか）を身をもって体験したことから、今日のメッセージを取り次ぎたいと思います。当時私は二十一歳、新潟県の瀬波（せなみ）海岸での出来事です。教会の青年会の「修養会」を八月に企画しました。瀬波海岸と言えば、「海は荒海、向こうは佐渡よ」と歌に歌われるほど、普段の日でも波が高いことで有名な海岸です。その日は台風が去った直後のことでもあり、高波でとても危険な状態でした。それでも企画を練り直す面倒さもあり、怖いもの知らずの若さも手伝って、若者たちは一斉に荒れた海へと飛び出していきました。

高い波と戯れながら楽しんでいると、突然に予想を遙かに超える大きな波が襲ってきて、私の小さな体は、その大波に呑み込まれ、気がついたときにはすでに体全体が海底の深みへと引きずり込まれていました。小さいころから泳ぎには慣れていて、多少は自信ももっていたのですが、その自信が却って災いしたのでしょうか。背中を海底の荒砂に削り取られるような激しい痛みの感覚と同時に、このまま海底から脱出できないかもしれない、という恐怖感・絶望感が私を襲いました。もし、私がこの巨大な波のエネルギーに逆らって自分で何とか苦境を脱しようとして抗ったり、もがいたりしていたら、きっと命を失っていたことでしょう。猪苗代湖畔で生まれ育った私は、大人たちや先輩たちから「もし大きな波に呑まれたら、決してじたばた暴れたりしないで、波に自分を委ねたらいい」、と教え込まれていたことを思い出し、水の勢いに身を任せました。気がつくと、私の体はいつしか寄せ返しの波の上にありました。「助かった！」と、私はその瞬間に確信しました。

それにつけても、あのときの水の重さ。体全体が圧迫され押しつぶされるかのような、何とも形容しがたいような重さと圧力でした。浜辺に上がって、当時医学部の学生であった友人に背中を点検して貰ったのですが、「君の背中は、一面皮膚が赤むけになっているよ」ということでした。そう言われるまではそれほどでもなかった痛みが、途端に大やけどを負ったような感覚で増幅しました。

私は、掛け値無しに神様から「いのちをもらった」と思いました。同時に、自分が「生きている」ということは必ずしも自明なものではない、ということを知らされました。じつに単純、素朴極まる受け止め方だったかと思います。しかし、この「自明でないいのち」、「生かされているいのち」、という素朴な感覚が、私の「今」をつくっていることも確かです。当時の私は弱冠二十一歳。英文学を専攻する学生の一人でしたが、教会で聖書を読み、尊敬する牧師のメッセージを聞き、友人たちとの交わりを通して、いつしか同志社での神学の学びを志し、人の心や魂の問題に関わる働きに遣わされたい、と願うようになりました。この何とも無邪気でシンプルな志を、当時の私は、自分なりに神からの「献身」への招きとして受けとめたのです。

生きていることは自明ではない

旧約聖書の預言者アモスは、「主を求めよ、そして生きよ」と呼びかけています。この呼びかけでは、「主を求めること」が「生きること」の大前提とされています。神を求めることなしに、生きることの保証はない、ということでしょうか。生きていることを当然のこと、自明のものとしている限りは、生きていること、生きることの重さ、その尊さ、気高さ、崇高さに気づくことはないでしょう。命の重みが軽んじられ、その意味が曖昧になっている人間の現実を思い知らされます。

預言者たちの活躍した時代、神との対話を放棄した人間や、自己を超えた神と向き合うことなしに事を図ろうとする人間の醜い現実が、時代を闇の世界に変えていました。人間の欲望とエゴイズムが権力の争いや政治の腐敗を生み出し、社会不安を増幅させ、「貧しい者を靴一足の値で売る」（アモス書　二章六節）不正義がまかり通る時代でした。主なる神ヤーウェの名のもとで行われる祭儀そのものがその内実性を失い、祭司たちから預言者たちに至るまで、腐敗と堕落の罪を免れることはできない状態でした。癒し難い格差社会の現実が、人びとをいたく苦しめました。差別や抑圧、権力者たちの横暴と驕り、宗教家たちの無節操と不信仰、裁きが曲げられ賄賂がまかり通る歴史の現実を、アモスは厳しく糾弾して止みませんでした。「裁きを苦よもぎに変え、正しいことを地に投げ捨てる者よ」（同　五章七節）と批判される時代が、彼の生きた歴史の現実だったのです。「それゆえ、知恵ある者はこの時代に沈黙する。まことに、これは悪い時代だ」（同　一三節）とも指摘されています。

時代の暗さ、不条理の現実は、時として心ある人びとに沈黙を強いる場合もある、ということでしょう。「これは悪い時代だ」と預言者を嘆かせた歴史の現実とは、一体どのような現実だったのでしょうか。

天災？それとも人災？

中国四川省の大地震、ミャンマーのサイクロンによる自然災害のニュースは、被害の甚大さが僅かずつでも明らかにされていくにつれ、単なる自然災害ではなく、この災害の背景にある「人災」の要素に気づかされて、心が痛みます。地震のために生き埋めになった多くの子どもたち、変わり果てたわが子の遺体を抱いて号泣する親たちの姿をテレビの映像に散見するとき、いったいなぜ？誰が？これらの人びとの悲しみを生み出したのか、と問う気持ちで一杯になります。子どもたちが学んでいた校舎が、考えられないような手抜き工事であったこと、その裏側に一部の権力者たちの賄賂のやりとりがあったことなどを知らされるとき、預言者アモスの時代批判、糾弾は単に紀元前の大昔の事柄ではなく、まさに現代の歴史の実態と何一つ変わらないのではないかと思い知らされます。ミャンマー軍事政権の腐敗ぶりも、まことに目に余るものがあります。世界のメディアを封印し、情報をひたすら囲い込んで実際の被害の状況を矮小（わいしょう）化し、それによって政権の維持を図ろうとする独裁政権の滑稽なほどの政治的画策、これらの人間の驕（おご）りを見れば、預言者ならずとも「これは悪い時代なのだ」と嘆かざるを得ません。

四川省の人びとの痛みをほんの少しでも分かち合おう、ミャンマーの人びとの悲しみを少しでも共有しよう、というささやかな試みが、今私たちの周りでもあちこちでなされています。今日のチャペル・アワーの会場にも、キリスト教文化センターの発案で、募金箱が設置されています。女子大でも宗教部がいち早く音頭を取って、今出川・京田辺の両キャンパスで募金活動を開始しています。私の所属する城陽教会でも、若者たちが組織する「ぶどうの会」が、声を掛け合って募金活動を始めました。このようにして各地から集められた義援金や援助物資が、確実にこれを必要とする現地の人びとに渡されるのかどうか、案じられる部分もないわけではありませんが、善意の取り組みそれ自体は、どちらかと言えば暗い闇の時代にあって、大いに心温かくされる事柄です。

病める社会にあって

私たちの身の回りで次々と起きている悲しい出来事、夫が妻を殺し、妻が夫を殺し、親が我が子を手に掛け、子が親を殺害する、といった悲惨な事件が、「またか」と言われるほど頻繁に報じられています。ＤＶ、家族崩壊、教育現場での混乱等々、問題を数え上げればきりがありません。子どもたちを取り巻く環境は、あまりにも厳しく、未来を担うべき子どもたちの心と魂が、修復が利かないほど飢え渇いていると言われています。教師たちでさえも適切な対応ができないままに、心病む人びとが増えている、と聞きます。まことに、現代は病める社会だ、と言わざるを得ません。子どもたちの遊び場がない、という悲しい現実もあります。どこの公園に行っても、そこに遊ぶ子どもたちの姿はまばらです。ブランコも滑り台も、その他の遊具も錆び付いています。子どもたちが安心して遊べる環境が整っていないのです。子や孫たちが公園へ遊びに行くときは、保護者が付き添わなければならない、といった淋しい現実があることも確かです。私の子ども時代・少年時代、モノは乏しく日常的に空腹感に耐えなければならなかった現実はあっても、仲間たちと夕方遅くまで遊び回ること、スリル満点の冒険にチャレンジしながら友との関係を作り出すことのできる環境は、十分に整っていました。学校の帰りに道草を食って親にしかられることはあっても、理不尽ないじめや体罰などは皆無でした。不登校やひきこもりといった言葉さえなかったと思います。「昔は良かった」式のノスタルジアに浸るだけでは現代の病める社会の矯正には役立たない、とは知りつつも、社会全体がこうした病根に真剣に向き合い、何らかの道筋を整えることは緊急な課題だと知らされます。

主の御心を探りつつ

「時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。」（エフェソの信徒への手紙　五章一六―一七節）と新約聖書のテキストは語っています。預言者アモスの言葉遣いとよく似た文言です。「悪い時代」を嘆くことは、誰にでもできることです。しかし、この「悪い時代」にあって、主の御心がどこにあるか、何が御心に適うことなのか、をわきまえ知る信仰の知識に至ることが求められています。預言者アモスにとっては、「生きる」ことは「主を求める」こと、すなわち「主の御心」を求めるによってのみ、体現される信仰の事柄にほかなりませんでした。「生きること」は、それ自体において完結した、自明なものでは決してありません。いのちの源をつかさどっておられる、自己を超えた、いわば絶対他者としての存在との関わりにおいて、「生かされて生きる」自己を再発見すること、自分のいのちの相応しい位置づけということが、今を生きる私たちに激しく問われています。すべての価値が相対化され、曖昧にされている今という時代にあって、主の御心をどのように探り出せるか、課題を共有できる者でありたい、と心から願い、祈ります。

二〇〇八年六月四日　同志社スピリット・ウィーク
京田辺チャペル・アワー「奨励」記録